

保育所における事故災害の実態に関する研究

齊藤 歎能（横浜国立大学）

1. 研究目的

乳幼児の死亡は年を追って改善されてきたが、その中で不慮の事故に原因する死亡はほとんど改善されていない。医学の進歩や薬学の進歩などによって他の死因による死亡が減少してきたために、全死因の中で占める事故死の割合が、むしろ年を追って高くなっていくといえる。したがって、乳幼児の事故防止は、この年令層に対する最も重大な課題であると言って過言ではない。

本研究においては、これら乳幼児の事故災害の実態を把握し、事故災害の要因を究明し、事故災害に対する対策を確立しようとするものである。

本年度は、東京都の A 区における実態調査を行ったので、その結果について報告をする。

2. 研究方法及び内容

調査対象——東京都の A 区における区立保育所保育園の 0 才児から 5 才児までの幼児について、過去 4 年間保育所内で事故災害を経験した男児 179 名、女児 113 名、計 292 名について調査を実施した。これら本研究において対象とした幼児は、事故災害によって日本健康センターの医療費給付の対象となったものである。

研究内容——本研究における調査内容は、●年次別事故発生件数、●年令別、男女別事故発生件数、●園別事故発生件数、●負傷発生の場合、●時間帯別事故発生状況、●保育状況より見た事故発生状況、●事故発生時の保育者の把握状況、●場所別事故発生状況、●傷害の種類別状況、●傷害の部位別事故状況等についてである。

3. 結果及び考察

昭和 54 年から昭和 58 年までの 5 年間の A 区の区立保育園における事故件数は、昭和 54 年には年間 146 件であったが、年々増加の傾向を示し、昭和 57 年度には 268 件と大巾な増加となっている。事故率も 2.43% から 3.94% と増加し、高率を示している。

年令別および男女別事故件数を過去 5 年間の事故件数からみると、0 才児 19 件から年々増加をして 5 才児では 292 件と多発する傾向がみられる。これは 0 才～2 才児と比較して

3～5才児はどの保育園においても非常に多いこと、また、3～5才児は身体的活動が活発になり生活圏が拡大され事故件数が増加している。事故発生件数から性差をみると、男児の630件に対し女児343件であり、男児の発生率が約2倍の値であり明らかに性差がみられる。

園別事故発生状況を過去4年間についてみると、1～5件が最も多いが、1年間に11件以上の事故を発生した園が8園もあることは注目に値する。

月別・曜日別・時間帯別事故発生状況をみると、月別事故発生状況では季節的に身体活動の激しい10月(105件)で最も多く、ついで新年度を迎え生活に慣れる5月(102件)に多発傾向がみられる。曜日別事故発生状況では、土曜日が休日となる家庭や半日の勤務のため幼児の退園時間が早い土曜日の事故発生件数(106件)が少ない以外は、どの曜日もほぼ同様な数値となっている。

時間帯別事故発生状況をみると、最も多い事故の時間帯は9時31分～10時30分で208件、ついで、8時31分～9時30分(181件)、10時31分～11時30分(178件)の順位であり、事故の大部分は午前中に発生していることがわかる。この時間帯は幼児が家庭から登園して、園の生活リズムに慣れる時間帯であるとともに、身体的にも活発に活動する時間とも合致することによる。また、午後3時31分～4時30分に再び上昇するが、これは午睡後の覚醒が十分でなく、心身の状態が鈍いためと思われる。

事故発生時の保育者の把握の状況をみると、保育がいる中で事故が発生したもの603件、保育がない中で事故が発生したもの290件となっており、安全管理の徹底と保育者の安全に対する配慮と危険予知能力を高めておくことが必要である。

保育状況より見た事故発生状況では、最も多いものが自由遊び356件であり、ついで、組別保育243件で、この両方で60.5%を占めている。このほか園外保育、降園時、午睡時の順位となっている。この保育状況から事故をみると、活発な遊びや運動などの活動を展開している時に事故が多発していることがわかる。

場所別事故発生状況をみると、園舎内55.1%、園庭34.2%、園外10.7%の順位であり、園舎内で事故が多発している。子どもは園舎内での生活時間が長く、保育室、遊戯室、ペランダなど集団として生活する場での事故が顕著である。園庭では、活動的な遊びを展開する固定遊具や運動遊びでの指導中に事故が見られる。これらの事故の原因を分析すると、子どもの行動による直接原因が多くみられる。この直接原因を分類すると、物や人に「あたる」「ぶつかる」など接触による事故や、「ころぶ」「つまづく」など転倒による事故、「おちる」「とびおる」など落下による事故が三大大行動事故要因となっている。これら子どもの行動をみると、自己中心的、衝動的、動揺性を伴ったものが多く、子どもの行動特

性による事故発生傾向をみることができる。

傷害の種類別状況では、挫傷、打撲症、骨折が3大傷害の種類となっており、事例をみると、かなり重篤な傷害をともなっていることも多く見られる。また、傷害の部位については、顔面部が432件で最も多く、ついで、頭部229件、手指部130件、上腕部107件、脚部106件の順位である。これらは幼児の身体発達の特徴と行動特性に関わりがあるようである。

4. まとめ

保育所に通園する子どもの年は0才から6才までと幅広く、心身の発達も未分化である。そのため、危険を判断する力も、事故を回避する身の処し方も持ち合わせないまま集団で生活しているため、よく事故が発生している。

多くの事故事例を分析すると、子どもの周囲の環境に対して安全への配慮を欠いたり、保育者の目が離れたすきに事故が発生したり、集団の中で自己を発揮できずに、また、逆に自己を主張し必要以上に子ども同志の衝突がおき危険な行動をとることなどによって事故が発生している。

保育所に見られる事故事例の一般的傾向は次のようである。

①建物の構造や付帯設備などによる構築物に関係した災害が多い。②保育所の災害の約30%は遊具に関係した災害である。③この年令段階の災害では接触事故、転倒事故、落下事故が多い。④月別、曜日別、時間帯別事故発生の状況では子どもの身体発達の特徴と行動特性の特徴が出ており、ある一定のパターンを見ることができる。⑤園内で起きる事故では、戸や扉の開閉に関した災害、机、椅子、ベッドなど什器に関係した災害が多い。⑥冬期にはストーブや熱湯などによるやけども多くみられる。このように保育園の事故事例をみると、保育園の特徴を持った事故災害が多いことがわかる。

以上のような点から、保育園における事故災害が非常に多く、防止対策が必要であることを痛感した。

今後の防止対策としては、安全管理面においては園の施設、設備に対する管理、特に、安全点検の実施など対物管理が必要であり、一方においては、子どもの年令が幅広く心身の発達が未発達であるため、保育者が子どもの人的管理を徹底して行うことが望まれる。

また、安全指導面では、保育計画の中に安全に関する計画を位置づけ、さらに園全体で年間、月間の指導計画や週案として具体化した指導が必要である。さらに、日常生活における危険場面において臨機応変な安全指導も適切に行われることが望まれる。

今回の保育園の事故災害の研究から、多くの実証と示唆を得ることができた。

表1 A区における調査園数

年	S54	S55	S56	S57	S58
調査園数	54	57	57	62	62

表2 事故総件数

年	総件数	事故率
S54	146件	2.43%
S55	143件	2.25%
S56	202件	3.17%
S57	235件	3.65%
S58	268件	3.99%
合計	994件	

表3 年令別・男女別事故件数 (S54~58)

	0歳児	1歳児	2歳児	3歳児	4歳児	5歳児
男	11	68	75	128	187	179
女	8	42	39	68	73	113
計	19	110	114	196	260	292

表4 園別事故発生状況 (S54~58, S57を除く)

	0件	1~5件	6~10件	11件以上	計
S54	6	42	6	0	54
S55	17	31	8	1	57
S56	7	35	13	2	57
S58	9	37	11	5	62
合計	39	145	38	8	230

表5 負傷発生の場合 (S54~57)

通常保育中	特例保育中	通園途上
94.3%	3.7%	2.0%

表6 月別事故発生状況

月		4	5	6	7	8	9	10	11	12	1	2	3	計
幼児	男	45	54	52	39	26	48	51	39	36	28	42	34	494
	女	16	27	21	26	11	28	29	22	25	17	13	21	256
乳児	男	11	10	19	14	7	8	16	20	19	15	10	9	158
	女	7	11	7	5	11	5	9	6	7	3	3	11	85
計		79	102	99	84	55	89	105	87	87	63	68	75	993

表7 曜日別事故発生状況

		月	火	水	木	金	土	計
幼児	男	94	96	89	76	84	56	494
	女	41	48	46	55	44	22	256
乳児	男	24	31	32	30	29	12	158
	女	7	17	10	18	17	16	85
計		166	190	177	180	174	106	993

表8 時間帯別事故状況

時間	7:31	8:31	9:31	10:31	11:31	12:31	13:31	14:31	15:31	16:31	17:31
	}	}	}	}	}	}	}	}	}	}	}
	8:30	9:30	10:30	11:30	12:30	13:30	14:30	15:30	16:30	17:30	18:30
件数	22	181	208	178	112	31	14	72	147	31	5

表9 保育状況別事故発生件数

保育状況	件数	保育状況	件数
自由遊び	356	昼食時	42
組別保育	243	活動の移動時	42
園外保育	70	通園時	23
降園時	69	合同保育	11
午睡時	68	排泄時	8
特例保育	53	おやつ時	6

表10 事故発生時の保育者の把握状況

保育者がいる	保育者がいない
603件 (71%)	290件 (29%)

表11 場所別事故発生状況

園舎内	園庭	園外
547名 (55.1%)	340名 (34.2%)	106名 (10.7%)

↓

↓

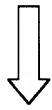
保育室	237	教材・教具	189
遊戯室	100	地面	103
ベランダ	92	プール	20
(テラス)		砂場	14
出入口	43	その他	14
手洗・水飲場	31		
廊下	28		
屋上・階段	13		

表12 傷害の種類

傷害の種類	件数	傷害の種類	件数
挫創	437	捻挫	59
打撲傷	175	外傷	54
骨折	112	脱臼	51
裂創	71	その他	127
切創	70		

表13 傷害の部位 (複数を含む)

傷害部位	件数	傷害部位	件数
顔面部	432	脚部	106
頭部	229	足指部	52
手指部	130	体幹部	50
腕部	107		



検索用テキスト OCR(光学的文字認識)ソフト使用

論文の一部ですが、認識率の関係で誤字が含まれる場合があります



1. 研究目的

乳幼児の死亡は年を追って改善されてきたが,その中で不慮の事故に原因する死亡はほとんど改善されていない。医学の進歩や薬学の進歩などによって他の死因による死亡が減少してきたために,全死因の中で占める事故死の割合が,むしろ年を追って高くなっているといえる。したがって,乳幼児の事故防止は,この年令層に対する最も重大な課題であると言って過言ではない。

本研究においては,これら乳幼児の事故災害の実態を把握し,事故災害の要因を究明し,事故災害に対する対策を確立しようとするものである。

本年度は,東京都のA区における実態調査を行ったので,その結果について報告をする。